

ドンマイ!!  
茜川オダマキーズ

(最終話)

主な登場人物

織田真紀―オダマキーズ捕手・キャプテン

海藤知慧―前同二塁手・副キャプテン

早田里菜―前同・一塁手

桐林沙月―前同・三塁手

龍野季穂―前同・遊撃手

城内美青―前同・監督

麓飛鳥―前同・中堅手

本村香苗―前同・左翼手

水上小夜―前同・右翼手

杉崎寿音―前同・投手

皆川悠希―前同・投手

園内裕美―スーパーマーケット・パート従業員

若本珠代―茜川高校・現代文教師

岡坂恵里―朝霞学園女子野球部投手

白石澄香―朝霞学園女子野球部部員・捕手

権藤凜子―朝霞学園女子野球部監督

恵理の彼氏

初田信和―【麓喜軒】従業員

灘純一郎―美青の夫

花恋―美青の娘

その他、全五話に登場したメンバーの家族等

○路上を走る【悠蓮会館】のマイクロバス

○マイクロバス車内

誰もが緊張した面持ちで座っている。

身を乗り出し前の席の知慧に声をかける香苗。

香苗「知慧ちゃん」

知慧「なに」

香苗「あれ唄ってよ」

知慧「あれって」

香苗「ほら、いつもカラオケで歌う松田聖子のチェリーなんとかつてやつ」

知慧「『チェリーブラッサム』?」

香苗「そうそう、それ。大好きなんだあれ」

知慧「え、なんで」

香苗「いいからさ、歌ってよ」

知慧「——うん、分かった」

『チェリーブラッサム』を歌い始める知慧。手拍子をする香苗。やがて手拍子、全員に広がっていき、合いの手なども入る。だんだんと盛り上がっていく車内。

初老の運転手も口ずさんでいる。

○走るマイクロバス

『チェリーブラッサム』サビ部分、全員の歌声をバックにして画面いっぱいになる!

○河川敷のグラウンド

マイクロバスが止まり、オダマキーズの面々が降りてくる。

石段を降りグラウンドへ。ベンチ前には裕美と珠代がすでに

来ている。二人の前に立つ十一人。

珠代「しっかり睡眠とった顔してるわね。騒いで夜更かしはしな

ったみたいね」

知慧「そりゃ大事な試合の前ですから。まあでも約一名鼻血出して悶々として寝れなかった人がいるかもしれませんけど」

珠代「え、鼻血？」

真紀「ちゃんと寝たわよ！」

笑いが起きる。

裕美「ほら、お出でなさったで」

河川敷の道に止まる、ボディに〈朝霞学園〉と大きく書かれたマイクロバス。ユニフォームを着た女子野球部員たちが降りてくる。最後に降車する凜子。

× × ×

グラウンドに散っている内、外野陣にノックを打つ裕美。キャッチボールをしている寿音と悠希。裕美を鋭い目で睨みつけている凜子。

× × ×

朝霞学園の守備練習。ノックを打つ凜子。激しい口調で選手を叱咤している。

× × ×

徐々にギャラリが集まって来て、一塁側、三塁側上の石段にこしかける。メンバーの家族が、次々とやってきて、談笑しながら石段に腰掛ける。

和樹もやってきて座る。

× × ×

ベンチ前、大坂が全員の集合写真を撮る。

大坂「今日はみんなの活躍、いっぱい撮らせてもらうからね」

小夜「向こうの選手の写真は一枚も撮らなくていいですからね、片平さん」

片平「はいはい」

季穂「専属カメラマンありなんて、一点先制だね」

朝霞ベンチ前で、メンバーを前に訓示を述べている凜子を見

る誰も。「はいっー!」「はいっー!」の音が響いてくる。

飛鳥「あー、やだやだ。あんなところで野球やってたんだね、悠希は」

悠希「うん——なんか部活の間『はい』しか言っていなかった気がするなあ」

美青「園内コーチ」

裕美「ん?」

美青「試合前にコーチから一言お願いします」

裕美「ええやろ、そんなんべつに」

美青「お願いします」

裕美「じゃあないなあ——みんな、上手になった。ええチームやと思う、ほんまに——あんな、こんなときに言うことやないけどな、わたしな、告白されてん」

驚く誰も。

裕美「同じ部署の主任さん。五十近いオッサンや。今頃アジフライやコロッケ揚げてるやろ。宗春のこと言うたよ。そんななかまへんって言うてくれた——わたしな、つきあってみようと思う。宗春のこと忘れられへんまま、これからもずっとあの子のこと好きなまま、彼の恋人になろうと思うんや——」

じつと裕美を見つめ続ける十一人。

裕美「なんか、みんなに知つといてほしかつてん——誘ってくれてありがと。嬉しいわほんまに、みんなと野球できて。楽しんでおいで、今日は」

頷く十一人。

珠代「えー、では顧問のわたしからも一言。ねえ、みんな。どんな生き方が美しい生き方だと思う?」

真紀「美しい生き方?」

珠代「そう——それはね、恋と革命に生きることなのよ」

知慧「恋と革命——」

珠代「そうよ! この試合に勝ってそれを証明しなさい! 誰よりもあの監督に! それから、前に言った通り勝って園内コーチの

辱めを雪ぎなさい！ 勝ってこい！」

十一人「はいっ！」

円陣を組み始める十一人。それを見ている裕美と珠代。

裕美「『恋と革命』か」

珠代「パクった」

裕美「え」

珠代「太宰治『斜陽』より」

裕美「さすが現代文の先生」

珠代「ふふっ。でも、本気でそう思ってる。あー、わたしも男作らなきやなあ」

肩を組んだ円陣の十一人。

寿音「さすが裕美さん」

里菜「珠代ちゃんもすごかった」

沙月「『恋と革命』だって。超カッコイイよね」

季穂「証明しようよ、それマジで」

飛鳥「絶対ホームラン打ってやる」

小夜「勝ってさ、片平さんにみんなで記念写真撮ってもらおうね」

香苗「美青ちゃん、朝ごはん作ってくれてありがとう。すごくおい

しかったよ——わたし、美青ちゃん大好き」

頷く誰も。

美青「ありがとう——この試合、大事なのは心は熱く、頭は冷静に  
つてことよ」

悠希「心は熱く、頭は冷静に、か」

美青「うん。言ったとおり悠希は四回まで。ノーヒットで抑えてて

も寿音に替える。それがゲームプランよ」

悠希「分かってるって」

知慧「ほら、あんたもなんか言いなよ」

真紀「え」

知慧「もう！ キャプテンとしてなんか言ってるの！」

真紀「あ、うん。そうだね——えと、わたしは、みんなに会えて本

当によかったって思ってる。このチームのメンバーでよかったって思ってる。嘘ついて海行ったりして、ごめんね。本当にごめんね——みんなと勝ちたい。この試合」

知慧「と、路チユー女が言っております」

笑う誰も。

真紀「もう、それ言うなって！ 絶対勝とうこの試合！ 美青が監督なんだから勝てる！ 裕美さんのノック受けてきたんだから勝てる！ みんなで、みんな朝霞に勝って優勝する！ 行くよっ！ せーの！ ゴー……」

十一人「オダマキーズ！」

叫ぶ十一人。円陣を解く。誰もが氣勢をあげながらホームベースの方へ向かう。

両チームが向かい合って整列する。

主審「まず両チームキャプテン、前に出てジャンケン」

ジャンケンをする真紀と相手キャプテン。勝つ真紀。

真紀「先攻で」

うなづく主審。

主審「ではこれより××カップ決勝戦、朝霞高校女子野球部と茜川オダマキーズの試合を、両チーム合意の下、特別ルールの九回制で行います。礼！」

脱帽し礼をする両チーム。守備位置に散る朝霞高校ナイン。

ベンチに向かうオダマキーズナイン。

試合が始まる。

マウンドには朝霞のエース、恵理。

ダイナミックなフォームから放たれるボール。一番、沙月、

二番、香苗、三番、季穂を三振に打ち取る。

朝霞ベンチ上の石段に恵理の恋人が座っている。ほんの一瞬彼に視線をやる恵理。

× × ×

マウンドに立つ悠希。真紀が駆け寄って。

真紀「いよいよ来たね」

悠希「うん」

真紀「緊張してる?」

悠希「さすがにちよつとね」

真紀「よし、緊張してるって自分で分かるんだったらOK牧場!」

悠希「——はははっ、ほんとそれ好きだよね」

真紀の額に軽くデコピンをする悠希。

真紀「もうっ! 緊張ほぐしてあげてるのが分かんないの!」

守備位置につく真紀。

主審「プレイボール!」

振りかぶる悠希。しなやかなアンダースローから浮き上がるようなボールが内角ギリギリに決まって。手を出せないバスター。

主審「ストライク!」

× × ×  
三者連続三振にきつとる悠希。朝霞ベンチの凜子を見ながらマウンドを降りていく。

× × ×  
マウンドの悠希。バッターボックスには四番の澄香。

甘く入ったボールをバット一閃。ホームラン。

悠々とベースを回る澄香。悔しそうな悠希。

真紀「ドンマイ、悠希! ソロだソロ。気にしないでいこう!」

里菜「ドンマイ、悠希!」

内野陣から次々かかる「ドンマイ!」の声。頷く悠希。

悠希、後ろを向いて。

悠希「打たせていくよ!」

次打者に向かっっていく悠希。

後続をセカンドゴロ、センターフライ、サードゴロに打ち取る悠希。

× × ×

バッターボックスに立つ沙月。ヒットを放つ。チーム初ヒットに盛り上がるオダマキーズベンチ。

香苗の送りバントが決まる。ワンアウト二塁で打席には季穂。季穂の打球が左中間を割る。快足を飛ばし三塁ベースを蹴る沙月。足から滑り込みセーフ。同点に沸き上がるオダマキーズベンチ。

続く悠希、里菜、知慧を打ち取る恵理。ベンチに戻ってきた恵理をしっかりとつける凜子。恵理を心配そうに見つめる彼女の恋人。

× × × ×  
澆刺とプレーするオダマキーズナイン。

横っ飛びで強烈な打球を捕る季穂。素早く起き上がってセカンドの知慧に送球する。受ける知慧。ワンアウト。ファーストの里菜に送球する知慧。しっかりとボールを受取る里菜。ダブルプレーの成立に拍手が沸く。

× × × ×  
ライトとレフトの間あたりにフライが飛ぶ。

小夜「任せて！」

スライディングキャッチを決める小夜。香苗、飛鳥とハイタッチ。笑顔で走りながらベンチに戻って帰って来る外野の三人。

× × × ×  
フォアボールで出塁する真紀。

石段に座る和樹が立ち上がる。

和樹「真紀——！」

飛び跳ねながら和樹に手を振る真紀。

真紀「和樹くん——！」

知慧「なにやっつてんだバカカップル！」

沙月「試合中だぞ！」

季穂「終わってからにしろ！」

明るい非難の声が飛ぶ。笑いに包まれるオダマキーズベンチ。それを苦々しい顔で見ている凜子。

× × ×

打席には沙月。長打を放つ。走り出す真紀。必死に走る。

二塁を蹴る。ベンチから声援が飛ぶ。三塁も回る真紀。球が返ってくる。クロスプレー。タッチをかくぐりベースに手を触れる真紀。

主審「セーフ！」

真紀「よっしゃあ！」

ガッツポーズの真紀。大喜びで真紀を迎え入れるオダマキーズベンチ。

スコアボードは五回表終了で2対1でオダマキーズ一点のリード。

× × ×

五回裏、朝霞学園の攻撃前。マウンドに立っている寿音。

真紀「いよいよ出番だね。悠希の好投、無駄にできないね」

寿音「そんなことは言われなくても分かってる」

真紀の額にデコピンをする寿音。

真紀「もう、みんなそばっかり！」

笑う寿音。守備位置につく真紀。

× × ×

主審「ボール、フォア！」

先頭打者にフォアボールを与える寿音。

真紀「落ち着いていこう、寿音！」

頷く寿音。

打席に入る澄香。対峙する二人。

見送りでツーストライクを取る寿音。

三球目、豪快な澄香のスイング。二打席連続のホームラン。がつくりと膝に手をつく寿音。朝霞学園の逆転。2-3。

美青「ドンマイ、寿音！。深呼吸して！」

ベンチから美青が叫ぶ。

悠希「ドンマイ、切り替えていこう寿音！」

「ドンマイ！」の声の内野陣全員から飛ぶ。外野の三人も叫ぶ。

しっかりと頷く寿音。大きく深呼吸する。後続を三者三振にきつとる寿音。

× × ×

キャッチャーフライが打ち上る。スライディングしてキャッチする真紀。和樹が立ち上がって拍手をする。嬉しそうに手を振る真紀。その様子をじつと見ている恵理。

× × ×

オダマキーズの攻撃。ツーアウトでランナーは里菜。バッターボックスに知慧。

恵理の彼氏「恵理、がんばれ！」

石段に座っていた恵理の恋人が叫ぶ。一瞬驚く恵理。彼氏を見る。頷く。知慧をピッチャーゴロに打ち取る恵理。

ベンチの前に出て、石段を振り仰ぎ彼氏の姿を認める凜子。

× × ×

朝霞学園の攻撃。ランナーが二塁にいる打席には恵理。寿音からヒットを放つ恵理。

恵理の彼氏「恵理！」

ガッツポーズをする彼氏。笑顔で小さくガッツポーズを返す恵理。その様子を見つめる凜子。

× × ×

ヒットを放つ澄香。三塁ランナーが返ってくる。

スコアボードは2―4で朝霞学園のリード。

× × ×

知慧と小夜が二塁、三塁にいる。打席には真紀。

恵理の彼氏「恵理、がんばれ！ 自信もっていけ！」

立ち会って叫ぶ彼氏。彼氏を見る恵理。強く頷く。

思いきり腕を振って投げる恵理。真紀をファーストゴロに打ち取る。

駆けながらベンチに帰ってくる恵理。弾ける笑顔で彼氏を見て、はつきりとガッツポーズをする。

ベンチ前に立っている凜子。

凜子「待ちなさい。なにさっきから」

恵理「え——」

凜子「つきあってるの?」

黙り込む恵理。

凜子「彼氏、とか?」

やがて頷く恵理。

恵理「ふーん、苦戦もするわけね」

うつむく恵理。

× × ×

スコアボードは八回の表裏を終わって2―4で朝霞学園のリード。九回表のオダマキーズの攻撃が始まる。

朝霞学園のベンチ前で。

凜子「澄香、最終回あなたが投げなさい」

驚く恵理。

澄香「え——」

凜子「返球で肩はできてるわよね。一塁の井上がキャッチャー。一

塁には川田が入って」

澄香「分かりました」

恵理「お願いします! 投げさせてください! 最後まで投げたいん

です! お願いします!」

凜子に懇願する恵理。

凜子「あなたみたいな人の事なんて呼ぶか知ってる?」

恵理「え」

凜子「裏切り者って言うのよ」

恵理「そんな……」

凜子「相手の先発と同じだったわけだ。九回投げ切る力つけられたら、ワンランク上のピッチャーになれるって思ってた先発させたんだけどなあ——親心もなにもあったもんじゃないわね」

恵理「——投げさせて、ください」

凜子「別れられる？ 彼氏と」

うつむく恵理。

凜子「ま、その話は試合終わってからゆっくりしようか。そんなに投げたいのなら投げてきなさい。きっちり抑えて勝ったらこれからのこと考えてあげるわ」

恵理「——はい、ありがとうございます」

涙を拭いながらマウンドに向かう恵理。その様を見ているオダマキーズの面々。

沙月「泣いてるよ」

季穂「分かっちゃったんだろうね」

悠希「ほんとなにも変わってない、あの監督」

マウンドに立つ恵理。バッターボックスには一番の沙月。

初球、甘く来た球をはじき返しライト前ヒット。沸き上がるオダマキーズベンチ。不安そうな顔の恵理。

恵理の彼氏「恵理、がんばれ！」

たちあがって声援をおくる彼氏。ベンチから飛び出し振り仰ぐ凜子。

凜子「黙りなさいあなた！」

驚く彼氏。座り込む。うつむいている恵理。

二番、香苗が送りバントを決めワンアウト二塁。

三番、季穂がライト前にヒットを打つ。ワンアウト一塁三塁。マウンドで泣き始める恵理。

溜息ついてベンチを出て主審に交替を告げる凜子。

マウンドを降りていく恵理。

ベンチを出る裕美。朝霞ベンチへ向かっていく。

対峙している凜子と恵理。

凜子「この試合、負けたらあなたの責任だからね」

帽子を脱ぎ、凜子に差し出す恵理。

凜子「なによ」

恵理「やめます——こんな気持ちにならなきゃいけないなら、野球なんてしたくありません」

凜子「——いいわ。こっちこそあなたみたいな子に教えたくない」

そこへやってくる裕美。

凜子「なによあなた」

裕美「野球を教える資格がないのはあなたよ」

凜子「ハア、なに言ってるのよあなたは！」

裕美、恵理の肩を優しくつかんで。

裕美「素敵な彼ね。まだ午前中よ。そのユニフォーム早く脱いで、おしゃれしてデートしてきなさい」

頷く恵理。石段を駆け上がって彼氏のもとへ。

凜子「この淫行教師が！ なに子供に言ってるのよ！」

裕美「——汚らわしいわね本当に、あなた」

凜子、口をパクパクさせて——。

凜子「なんで、なんでわたしがっ！ 汚らわしいのはどっちよ！  
言ってやろうか、ああ！ あんたが未成年と何をしたか！ な  
んで教師やめることになったか！ ああ、今ここで全員に言っ  
てまわってやろうか！」

裕美「好きにすれば」

ベンチに戻っていく裕美。

怒りの表情を浮かべて裕美を睨みつけている凜子。

裕美「バカは死ななきゃ治らない、かあ」

珠代「教師のバカは死んでも治らないわよ」

裕美「確かに——飛鳥」

バッターボックスに向かう飛鳥を呼び止める裕美。

飛鳥「はい」

裕美「ホームラン打ってきなさい」

飛鳥「——はいっ！」

気迫に満ちた顔でバッターボックスに向かう飛鳥。

打席に立つ飛鳥。眼光鋭くマウンド上の澄香を睨みつける。

初球、バット一閃。快音と共に白球が高く舞い上がる。

スリーランホームラン。大歓喜のオダマキーズベンチ。飛び

跳ねながらホームインする塁上の二人。右腕を高々と突き上

げ、塁を回っていく飛鳥。帽子をたたきつけ悔しがる凜子。

スコアボードに3が入り、オダマキーズ5・4と逆転。

× × × ×

九回裏、朝霞学園最後の攻撃。

マウンドに立っている寿音。二者連続の三球三振。

あとワンアウトでオダマキーズ勝利。

三番恵理の代打A、を呼び寄せ、肩を抱いて耳打ちする凜子。

驚くA。

凜子「分かったわね」

頷くA。バッターボックスに立つ。

振りかぶり、ストレートを投げる凜子。巧みに左ひじを出す

A。ボールが当たる。

主審「デッドボール！ テイクワンベース！」

一塁を指さす主審。一塁に向かうA。手を叩く凜子。マウン

ド降り審判に向かつていく寿音。

寿音「ちよっと！ わざと当たったでしょ今の！ どこ見てんの

よー！」

慌てて駆け寄る真紀。

真紀「やめとこ、寿音。抗議しても判定変わらないよ。それよか次

に集中しよ。抑えたら勝ちだよ」

寿音「次って——」

素振りをしながらバッターボックスに入る澄香を見る二人。

真紀「大丈夫、今度こそ抑えられる」

寿音「簡単に言うよなあ」

守備位置につく真紀。

マウンドの寿音。うつむきボールを何度かグラブに叩きつけるしぐさの後――。

寿音「タイム！ みんな来て！（外野を見て）飛鳥も香苗も小夜も！」

マウンドに集まる九人。話をする。誰もが頷き、それぞれの守備位置へ。マウンドに残った寿音と真紀。

真紀「美青、来て！」

ベンチの美青に叫ぶ真紀。

美青「え――」

裕美を見る美青。

裕美「キャプテンが言うてるよ」

美青「はい」

マウンドに向かう美青。

マウンド上の三人。ボールとグラブを美青に渡す寿音。

美青「え――」

寿音「美青が投げて」

美青「ちよっと、なに言ってるの」

寿音「正直抑えられる自信はわたしにはない。でも、美青のナツ

クルなら打ち取れる。勝てる。だから、美青が投げて」

美青「――そんな、無理だよ」

寿音「美青のナツクルじゃなきゃ朝霞に勝てない。わたし、朝霞に

勝ちたい。みんなで勝つんでしょ、美青」

寿音を見る美青。頷く寿音。

真紀「捕るよ絶対わたし」

真紀を見る美青。頷く真紀。

――やがて、強く頷く美青。

マウンドを降りる寿音。守備位置につく真紀。マウンドに立

つ美青。

真紀、主審に向かって告げる。

真紀「選手交代します。投手、杉崎に代わって城内」

頷く主審。

澄香「ふーん、負けるの分かって思い出づくりってやつだ」

真紀「とか思ってたらいいと思うよ」

捕球態勢をとる真紀。

真紀「さあ美青、あと一人、しまつていこう！」

マウンド上、うつむいている美青。少し震えている。

真紀「美青！」

顔を上げ真紀を見る美青。

真紀「後ろ見てみ！」

振り返る美青。

内野の里菜、知慧、沙月、季穂が、笑顔で美青の名を呼んでいる。外野の飛鳥、香苗、小夜も叫んでいる。ベンチからは寿音と悠希も。

知慧「ほんと、ふだんしょーもないことしか言わなくせにあの女  
つてば——美青、大丈夫！ 思いきつていこう！」

強く頷く美青。セットポジションをとる。

第一球、ナックルボール。揺れるその球。空振りする澄香。

捕れない真紀。パスボール。それを見て二盗を決めるA。驚く澄香と凜子。

凜子「なによ、あれ——」

真紀「ごめん、美青！」

頷く美青。

二球目。ナックルボール。空振りの澄香。パスボールの真紀。

三盗を決めるA。悔しがる真紀。

凜子「タイム！」

澄香を呼び寄せる凜子。

美青「タイム！」

マウンドの美青の下へ走っていく真紀——。

(F・O)

○【悠蓮会館】・菊の間

冒頭、美青の法要場面に戻って。

沙月「前から気になってたんだけどさ、最後のボール、真紀が投げようって言ったの？」

真紀「ううん、美青。『前の二球見て、あの監督絶対動いてくる』って」

季穂「さすが美青だ」

真紀「投げる前に握りを見せようって言ったのはわたし」

知慧「へーえ、あんたもやるじゃん」

真紀「へへへ、でしょ」

知慧「いい気になるな」

笑いが起きる。

小夜「でもさ、試合終わったらさっさと帰っちゃって、結局裕美さんに謝らなかったね、あの監督」

悠希「美青すごい怒ってたよね」

寿音「うん。裕美さんが一生懸命なだめてたの覚えてる。『その気持ちだけで十分だ』って」

香苗「今どうしてるんだろ、あの監督」

里菜「教育委員会に異動になってずっとそのまま。うちの従業員で朝霞の卒業生がいて言ってたんだけどさ。たまーに練習見に来て勝手に指導初めてお説教したりして、部員に嫌われまくってるんだって」

飛鳥「はーあ、らしいっちゃらしいままだねえ——お、きたきた」

信和が出前のチャーハンとギョーザを持って来る。

真紀「うわー、久しぶり。やっぱこれ食べないとねえ」

信和、それぞれの前に配膳する。美青の遺影の横にも。

食べ始める誰も。やがて、純一郎と花恋以外の手が止まる。

飛鳥「ノブ」

信和「ん？」

飛鳥「味付け、いつもどおりだよね」

信和「え？ なに言ってるんの飛鳥。いつもどおり——っていうかい  
つも以上に気合入れて作らせてもらったけど、大将も俺も」

飛鳥「そう——」

純一郎「あの、なにか。とてもおいしいですけど。美青、いつも言  
ってたんですよ。『麓喜軒の味は最高だ』って。美味しいよな、

花恋」

花恋「うん。すごくおいしいよ」

食べ始める十人。誰もが泣き始める。泣きながら食べていく。

真紀「これって、これってき、あのときの——」

知慧「分かってるよ。黙って食べなよ」

真紀「こんなことしなくたってき、いたずらが過ぎるよ、美青——」

泣きながらチャーハンとギョーザを食べていくオダマキーズ  
の面々を不思議そうに見ている純一郎と花恋。

(F・O)

○河川敷のグラウンドに戻って。

(前々場面からの続き)

澄香の肩を抱きよせ耳打ちする凜子。

凜子「振るんじゃない。見送りなさい」

澄香「え」

凜子「あの球はストライクにはならない。キャッチャーも捕れな  
い。あのピッチャーにはあの球しかない」

Aを見る凜子。サインを出す。頷くA。

凜子「まずは同点。勝負はそこからよ」

頷く澄香。

その間にマウンド上で話しをしていた真紀と美青。

美青、頷く。真紀も頷く。守備位置に戻る真紀。バッターポ

ツクスに入る澄香。

マウンド上、五指を折り曲げナックルボールの握りを澄香に

見せる美青。

真紀「次は捕る、絶対。それで試合終了!」

凜子に向かって叫ぶ真紀。不敵に笑う凜子。

美青、セツトポジション。

美青、投げる——同時にAが本塁に向かって走り出す。真紀が立ち上がる。大きく横に一步踏み出す。

凜子「ああっ!」

美青が投じたのはナックルではなく、振ってもバットが届かないほどに大きく外れるウエストボール。呆然と見送る澄香。しっかり捕球する真紀。

主審「ボール!」

本盗を試みていたAが慌てて止まる。三塁へ帰塁しようとする。Aを追う真紀。ボールを掴んだミットでAの背を強く叩く真紀。スリーアウト。

主審「アウト! ゲームセツト!」

真紀「言ったでしょ、絶対捕るって!」

凜子に向かって叫ぶ真紀。立ち尽くしている凜子。

真紀「美青——っ!」

マウンドの美青に向かって駆け出す真紀。守備位置についていた誰も。ベンチから寿音と悠希も飛び出してきて。

真紀「勝ったよ美青! 朝霞に勝ったよ! 美青が投げて勝ったよ——」

美青を抱きしめる真紀。

誰もが、涙を流し、名前を呼びながら次々と笑顔で美青を抱きしめていく。

ベンチで泣いている裕美。その肩を抱き寄せる珠代も泣いている。

啞然となり、されるがままになっている美青。やがて、美青の目から零れる涙。

知慧「みんな円陣組んで! 行け真紀!」

マウンド上で肩を組み円陣を作る十一人。

真紀「じゃあ行くよ！ ゴー……」

十一人「オダメキーズー！」

十一人の両拳が、青空につきあがる。

(完)